

I 東アジア共生と極東地域研究センター

平成 22 年度から極東地域研究センターを事務局として「東アジア共生学創成」プロジェクトが始まった。富山大学内でアジア研究をしている多くの教員が参加しており、経済、環境、安全保障（国家間の安全保障と人間の安全保障）の 3 分野に分かれて研究が行われている。2011 年 2 月には日本のアジア研究者をはじめ、中国、韓国、英国から研究者を招いて『東アジア「共生」学の探求』と題する国際シンポジウムが開催され、東アジアにおける「共生」のあり方が議論された（各分野の研究内容については別項を参照）。

「共生」とは何だろう。宗教的、生物学的な考え方もあるが、ここでは字義通り「共に生きる」とことと考えよう。ただし単に「共に生きる」だけではなく、「お互いにより良く」生きていくことが大事である。研究手法である上述の 3 つの分野で東アジアは、各々、国家が、社会が、企業が、そして個人が影響を与えあっている。東アジアは 1997 年のアジア経済危機、2008 年秋のリーマン・ショックを乗り越えて力強く発展の道を歩んでいる。とくに中国は 2010 年には GDP で日本を抜いて世界第二位に躍り出た。2050 年までには米国をも凌いでいるだろうとの推測もなされている。一方でその中国では所得格差の拡大、高齢化の進展、環境破壊、役人の腐敗などによって崩壊論も囁かれている。中国が高度成長をこれからも続けていくにしろ、成長の急ブレーキがかかるにしろ、日本をはじめとして周辺アジア諸国への影響は大きい。「共によく生きる」ために何が必要かを考えていくべき時^{とき}なのだろう。

考えてみれば、まだ国境という概念のない時代、つまり近代国家が誕生する以前から東アジアでは人々の交流が行われていた。技術の発達によって人々は安全にしかも速く、よその土地、よその文化を知ることができるようになった。またインターネットの発展により、情報の受発信も世界中で容易に行えるようになった。沢山の情報が発信される故にか、表層の現象のみが一人歩きをしているように感じられる。だからこそ「学問」として東アジアを研究し、その成果を発信すべきだと極東地域研究センターでは考えている。

(文責：今村)

II 研究紹介 (2) — 経済研究班・山本雅資 —

私は環境経済学と呼ばれる分野を研究していますので、私が北東アジア地域という「材料」を切る「道具」は経済学です。環境経済学は「環境保全か経済発展か」という二者択一ではなく、経

済システムを持続可能な形で成長できるものにするためにはどうすればよいかを考える学問です。

多くの環境問題は経済活動がより拡大したこと起因しています。例えば、地球温暖化は産業革命以降に人類が化石燃料をエネルギーとして積極的に利用するようになったことが原因と考えられていますし、森林の伐採や砂漠化など人類が経済活動を行うスペースを拡大した結果として発生しています。環境問題が経済活動の拡大によって引き起こされたものであるなら、その経済活動を環境にやさしい方向に導くようなインセンティブを経済システムの中に組み込むことで、環境問題を解決することができるのではないかというのが環境経済学の考え方です。

一口に環境問題といってもさまざまな問題がありますが、近年は主に廃棄物・リサイクルといった資源循環の問題に関わるテーマを中心に研究を進めています。廃棄物問題の出発点は、「何が廃棄物であるかは自明ではない」ということを認識することだと思っています。例えば、私は NBA が好きでコレクションしている DVD がありますが、これは私の妻にとってはほとんど「廃棄物」として認識されています。また、現在では人間の排せつ物はお金を払って回収してもらいますが、江戸時代には買ってもらえることができました。このように、何が廃棄物であるかは、その財固有の特徴であるわけではなく、誰がそれを見るかによって、あるいはいつの時代かによって変化します。これはすなわち、廃棄物であるかどうかは、その財の需要と供給のバランスによって決まっているということを意味しており、極めて経済学の問題であることがわかります。廃棄物の発生が経済的な動機に基づいているとすれば、対処する政策においても経済学が役立つことになるのです。

具体的な直近の研究テーマとしては、日本の不法投棄の要因分析を行いました。現在、この研究で得られた知見を東アジア諸国を中心に国際比較する方向で拡張したいと考えており、手始めに韓国の研究者と共同研究の計画を進めています。



被覆銅線から銅を取り出した後の不要物（中国にて）

(文責：山本)

III 講演会・シンポジウム等実施報告

富山大学「東アジア共生学創生の学際的融合研究会(CEAKS)」主催の国際シンポジウムの中で、経済チームの分科会が2011年2月14日に開催された。同分科会では「世界経済危機後の東アジア経済協力」というテーマのもと、日中韓の共同研究者とASEANを代表する研究者を迎え、発表と討論を行った。

当日の発表と論点を簡単にまとめると以下のとおりである。まず、韓国のインハ大学経済学部教授である鄭仁教先生は「東アジアにおける関税コードの調和化」というテーマで、東アジア経済統合と関連して国際的な商品の名称及び分類について、統一システムを構築する必要性を中心に発表した。そして、東アジアにおけるASEAN+1の貿易自由化のネットワークが確立された段階で、関税分類基準の統一(調和化)は東アジアにおける経済統合をより深化させていくための緊急課題の一つであり、議論を強化する必要があると強調した。還日本海経済研究所の主任研究員である中島朋義先生は、「太平洋の懸け橋としてのAPECの将来と展望」というテーマで、東アジア経済統合と関連して米国との関係構築におけるAPECの役割を中心に発表した。特に、米国のFTAAP(アジア太平洋自由貿易圏)、TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)を通じた対アジア戦略などについて分析し、米国はAPECとTPPを東アジアとの懸け橋として活用しようとしていると指摘した。

カンボジア政府の内閣府経済社会評議会事務局長であるヴォンサムアン(Vong Sam Ang)先生は「グローバル経済危機、その影響とカンボジアの対応」というテーマで、2008年のグローバル経済危機のカンボジアを含むASEAN経済と域内経済統合への影響を中心に発表した。また、東アジア経済統合におけるASEANのこれまでの役割を評価するとともに、2015年を目標として進んでいる「ASEAN経済共同体」についても楽観的に展望し、東アジア共同体の基盤となりうると強調した。最後に、中国の洪明順先生は「中国の地域経済と外資系企業の環境変化」というテーマで、1980年代以降の中国の投資環境の変化と外資系企業の対応を中心に発表した。とりわけ、洪先生は、労働力不足問題、賃金上昇と最近頻発している外資系企業におけるストライキ問題など中国の経営環境が急変している中で、日本企業の対中進出戦略と中国での具体的な事業戦略を提示した。

同シンポジウムは、東日本の大震災の直前まで日本のTPPへの参加問題などで世論の関心が高いテーマであったため、一般市民の方の参加も多く、盛況のうちに終わった。

(文責：金)

IV 研究プロジェクト紹介(2)

1) センター重点プロジェクト

平成22年度課題「極東ロシアの気候変動・森林火災と生態系の変化」に関連した研究セミナー「極東ロシアの環境と経済における諸問題」が2011年3月2日に富山大学理学部にて開催された。参加者は20名であり、理学部・理工学教育部から9名の学生が参加した。極東ロシアにおける自然と経済に関する貴重な情報が得られ、今後の極東ロシアにおける共同研究に期待が膨らむ有意義なセミナーとなった。(文責：和田)

2) 国際シンポジウムのご案内

極東地域研究センターでは中国(中南林業大学)、韓国(江原大学)と共に北東アジア学術交流ネットワーク会議を開催している。2011年は10回目の会議となり、富山で8月22日(月)、23日(火)に国際会議場で開催予定である。今年度の会議は富山大学・経済学部と共催し、中国からは上述のほか、中国人民大学(公共管理学院)、西南交通大学(物流学院)を、韓国からは仁荷大学(静石物流通商研究院)を招き、「東アジアの共存をめざして」という共通論題で行う予定である。22日午後に行われる全体会議は、オープンな会議としていきますので、東アジアに興味のある方はもちろん、これから興味を持とうという方もぜひご参加ください。

(文責：今村)

V 地域研究四方山話(2)

紅、黄、白、この3つの漢字の次に来る共通の漢字は何でしょうか。答えは「酒」という漢字です。「紅酒」これはなんとなくわかると思いますが、赤葡萄酒のことです。一時赤葡萄酒のコーラ割も「紅酒」と呼ばれていたことがありました。ただ中国でもおいしいワインが販売されるようになって流行しなくなったようです。「黄酒」の代表は紹興酒と呼ばれている酒です。古いものほどよいとされ10~20年を経た「老酒」はまるやかです。「白酒」は無色透明で度数の高いお酒の総称です。日中国交樹立の際に、当時の田中首相がおいしいといって有名になった茅台酒や、5種類の穀物を原料として作られる五糧液など多数の銘柄があります。度数が高いので、当然多くの穀物を原料とすることから、不作であった1994年には「宴会で白酒を飲むのを自粛するように」との通達が出されました。各省庁がそれに賛同したのに対し、肝心の農業部はとうとう賛同を表明しなかったのは何故だったのでしょうか。最後に白酒に関わる言葉「白酒紅人面、黄金黒世心(白酒は人の顔を赤くし、黄金は世の人を腹黒くする)」でこのコラムを締めくくるとしましょう。

(文責：今村)